
15. 体験宿泊型ADL住宅（可変型住宅）は、地域に根ざした「住まいの玉手箱」 バリアフリーデザイン研究会 （熊本県下益城郡富合町）

I. 活動の背景と目的

高齢社会の現在、地方都市熊本市も高齢化が著しい。ソフトである在宅福祉サービスは、検討されつつあるが、在宅の基盤であるハード（住宅、設備）は、対応システムが明確ではないようである。そこで、住宅での高齢化対応の設計相談活動や完成までのプロセスを提示できることが重要であると考え、今回の可変型住宅づくりと地域活動支援、運営システムを構築しようとした。

この住宅は、単なるモデル住宅でなく高齢者、特に要介護の在宅者や施設や病院からの家庭復帰者を対象に、体験を通して納得の上での住宅改善を誘導する施設を目指している。当然、地域の住民の利用はもちろん、在宅介護やサービスを行う専門スタッフに利用してもらう住宅施設であり、利用者と専門家の交流の場でもある。

II. 活動の内容

1. バリアフリーデザイン研究会を核にして、富合町のにしくまもと病院の敷地内に建設を計画する。（月1回のディスカッション）
2. にしくまもと病院の関連施設（特養、ケアハウス、在介センター、周辺環境など）の視察・調査
3. コンセプトの形成（スタッフ：建築士、建築専門の大学教員、大学医学部教員、PT、OT、MSW、保健婦などの参加による積み上げ作業）
4. 基本計画の検討：3. のコンセプトをベースにする
5. 計画の確認と建設スケジュールの検討
6. 次年度の計画策定
7. 実施設計完了
8. 建設段階（敷地の変更による遅延）：なるべく早急に解決する



設計案の検討

III. 活動の効果及び今後の課題

1. 活動の効果

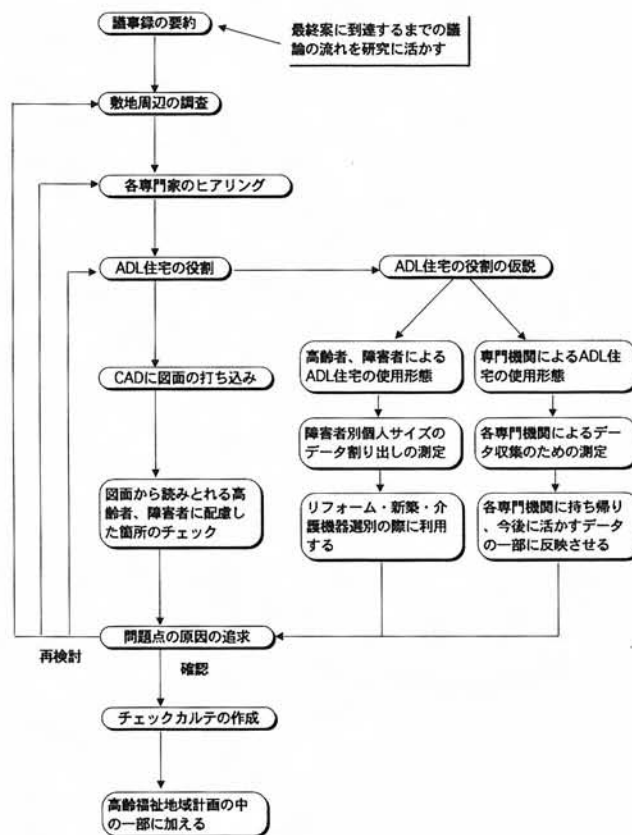
今回の助成により、NPO的な活動を目指してきた。模型製作、設計、資料作成（印刷）には、助成があつて可能になった。また、ハウジングアンドコミュニティ財団の支援理念や関連資料（NPOに関する調査資料など）も私たちの活動を支えた。今回の助成支援には、組織参加者は深く感謝している。

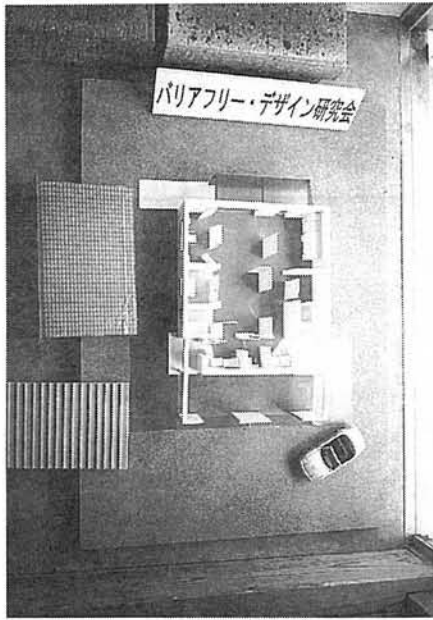
2. 今後の課題

1. 建設後の利用計画とシミュレーション実施
2. 運営方法の確立（専属の職員配置、利用時間、運営費など）
3. 各専門家の参画方法（医療、リハビリ、建築、保健、サービス、福祉など）
4. 行政との連携方法（国、熊本県、熊本市、富合町、町内校区）
5. 研修、研究の場づくり

IV. ADL 可変型住宅研究の概要

1. ADL 可変型住宅研究の流れ





↑ 10月に行われた「生きいきセミナー」

← ADL住宅の模型

2. 今日の住宅事情と課題 ～つくり手から住み手へ～

住宅の建設、リフォームに際して、つくってしまったから「こうすれば良かった」「使い勝手が悪い」ということをよく耳にする。この一番の問題点は、実際体験して自分のサイズというものを把握せず、憶測でつくってしまうということが挙げられる。

また高齢者障害者に関しても、同じように十分なデータがないままにつくってしまうので、同じ誤りを繰り返してしまう。

これらを解消するために考えられたのがこのADL住宅である。ここでは以下のようなことを体験し、住まいづくりに役立てることが出来る。

- (1) 医療・リハビリ専門家が退院時に家庭復帰できるADL水準にあるかどうかを検討する実践の場。
- (2) 住宅建設、リフォームに際して自分に適したサイズを知ることが出来る。
- (3) (1)(2)をもとに住宅改善方針のカルテ記入が可能な設定とする。
- (4) 建築士と医療や福祉サイドとの住まいづくりの共通認識づくりの場とする。
- (5) 患者、利用者本人に対応できる設計場面の設定(可変性)が可能である。
- (6) 体験宿泊することで、本人および家族の納得が得られる。
- (7) 専門的データを把握し、利用者本人および同じ症状の人に対応できる空間計画を提案する。

以上のようなことを体験することで、先に述べたような問題を解消し、住み手が満足するようなものをつくることが出来ると考えられる。